

カシケ・トウピー・ウンバンダ教会

——ブラジルの新宗教の一考察

藤 田 富 雄

- 一 はじめに
- 二 ウンバンダについて
- 三 近代的ウンバンダの白人化運動
- 四 カシケ・トウピー教会
 - 1 教会の成立
 - 2 教会の建物と配置
 - 3 女教主(マンエ・デ・サント)
 - 4 プレト・ヴェリョの日の儀礼
 - 5 教会の経済状態
 - 6 信者数と階層
 - 7 教会についてのまとめ
- 五 林田法人小教父(パイ・ペケノ)
- 六 おわりに

一 はじめに

アフロ・ブラジルのエスピリタ (Espirita Afro-Brasileira) については、すでに
一九八一 『宗教と社会』 春秋社
一九八二 『ラテンアメリカの宗教』 大明堂
一九八四 『立教大学ラテンアメリカ研究所報』 創立
二〇周年記念号
一九八六 『世界の地理』 朝日新聞社
などに論文を發表しているので、一九八八年、サンパウロにおけるウンバンダの小さな教会の実態調査の報告をするのが、本稿の目的である。

二 ウンバンダについて

一九八〇年アフロ・ブラジルのエスピリタ（心霊主義信者）は、統計上では二五〇万にすぎないが、カトリック信者であってエスピリタ活動に参加している潜在的信者は三、三〇〇万を超えて、ブラジル人口の三〇%以上である（『世界キリスト教百科事典』教文館、一九八六年、七四一～七四三頁）。人口約一億三千万の九〇%がカトリック信者である世界最大のカトリック国ブラジルで、その三〇%がアフロ・ブラジルのエスピリタであることは、ブラジル宗教の著しい特徴の一つである。

ブラジル司法省は、一九六五年以後、それまでエスピリタと一括して発表した統計を、カルデシスタ部門とウンバンダ部門に分類した。現在では、前者をアルト・エスピリテイスマ（high spiritism）、後者をバイシオ・エスピリテイスマ（low spiritism）として分類している。ハイ・スピリテイズムは、Alan Kardecの心霊術を受けついで正統的カルデシズムを信仰する少数派で、科学、哲学、宗教などを強調し、社会福祉の面で積極的活動を展開している。ロー・スピリテイズムはアフロ・ブラジリアン・カルト（cultos afro-brasileiros）で、ヨルバ系、バントゥ系のアフリカ古来の宗教から派生した多くの教派の総称である。アフロ・ブラジルのエスピリタと

は、後者のロー・スピリテイストにはかならない。

このアフロ・ブラジリアン・カルトには無数の分派がある。古谷嘉章は従来の分類法を検討し「カンドンブレ・ナゴ・モデル」（Candomblé Nagô Model）と「ウンバンダ・モデル」（Umbanda Model）の二つのモデルを提出している（『民族学研究』五一巻三号別冊、一九八六年一二月、二四八～二七四頁）。カンドンブレは、バイア州で形成された教派で、ヨルバ族の神霊であるオリシヤ崇拝の儀礼のシステムといえる。それぞれのオリシヤ（Orixá）は、カトリックの聖人（キリストや聖母を含む）に対応しており、信者はそれぞれ特定のオリシヤを自分の守護霊としてもっている。カルト・グループは儀礼をおこなう教会（terreiro, tenda）に所属し、リーダーは原則として女性の霊媒であり、マンエ・デ・サント（Mãe de Santo）と呼ばれている女教主である。霊媒は自分の指導霊によって憑依されるだけであり、他のオリシヤが憑依することはきわめて少ない。死者の霊（egun）も憑依しないから、インディオの死霊であるカボクロ（caboclo）はアフロ系オリシヤでないので、カンドンブレでは排除されている。以上が「伝統的カンドンブレ」の主な形式的特徴である。

これに対して、ウンバンダは、一九二〇年代に成立し、各グループの独立性・自律性が高くて標準化しにくいだ

けでなく、黒人奴隷のもってきたアフリカの宗教、原住民インディオの宗教、カトリシズム、カルデシズム、東洋の宗教などの諸要素を採りいれ、採用混合の程度もそれぞれのグループで異なるので、きわめてシンクレティックで、著しい多様性がみられる。したがって、正統的カルデシズムからは、カルデシズムの「黒色化」(em-preticimento)として非難され、伝統的カンドンブレからは、アフロ・ブラジリアン・カルトの「白色化」(embranquecimento)として軽蔑されてきた。

一九三〇年のヴァルガス革命に始まり一九六〇年代に推進されたブラジルの都市化・工業化・近代化の主導的役割をはたしたのが、ウンバンダの信者であると高い評価をしている学者も多い。Esther Presselは、ブラジルという発展途上国における宗教的革新と解釈し、Renato Ortizは、都市産業社会の提供した新しいコードによって伝統的価値を再解釈していると考えている。すなわち、少数の特権階級と大多数の貧民階級を構成要素とする旧い社会システムから、社会の中間層が主役となつて、各自の努力によって上昇する新しいシステムへの脱皮を志向するイデオロギーと、ウンバンダのシステムは整合的であるとする。Diana Brownは、ウンバンダでは、オリシヤは憑依しない高位の神格として祀り上げられ、インディオの霊カボクロが中心的地位を占め、ア

フリカ性が否定されて、ブラジルのアイデンティティ(Identidade brasileira)が追求されていると主張する。⁽³⁾一九六〇年以後の信者の増加率は著しく、ウンバンダに対する学者の高い評価も一般に承認され始めている。

三 近代的ウンバンダの白人化運動

サンパウロ市郊外の工場地帯であるABC地域のウンバンダ連合会長Ronaldo Linaresのテレイロでは、アフリカ伝来の楽器であるアタバケの使用をやめたり、午後主婦や子供のための儀礼の時間を設けたりしている。ウンバンディスタの社会的地位を高め、中産階級をテレイロに來させて、テレイロに愛情にみちた心の病いの救急病院の役割をはたさせるのが目的である。市内のドナ・ベリディアナ地区連合会長のAbrumolio Vainerは、六〇歳まで市会議員として活躍し、名誉叙勲者(Comendador)という称号をもっている。彼のオシヨシ・カサドール教会(Tenda de Umbanda "Oxóssi Caçador")では、アタバケは使用しているが、オリシヤへの讃歌には、ヨルバ語のほかに、ポルトガル語も用いられている。彼によれば、ウンバンダの教義と儀礼をたゆみなく学習することによって、信者は自分の守護霊と語りあう能力を開発し、苦悩を癒し、根本的な生活力を得ることができる。明らかにカルデシズムの「霊的進化」(evolução

espiritual) の影響が見られる。そこで黒色霊も向上して白色霊となりうるのでウンバンダでは白色霊と呼ばれる善い神霊しか憑依しないことになる。この積極的な生き方の強調こそ、近代のウンバンダの真髄であって、社会学者はこの新しい運動を白人化運動と名づけている。ウンバンダに中産階級を来させるだけでなく、上流階級をも吸収しようとしているのである。

このような近代的な男性の教会主 (Pai de Santo) を指導者とするウンバンダ教会は勿論だが、場末の小さなウンバンダ教会の儀礼や組織なども、伝統的カンドンブレとは明らかに異なることを解明実証しようとするのが、一九八八年の調査の目的であった。幸にも林田法人という小教父 (Pai Pequeno) の役職にある日系人と出会うことができた。以下は、彼をインフォーマントとして、実態調査をした報告で、小教会のウンバンダにおける現状を考察するチャンスが与えられたことは幸運であった。

四 カシケ・トゥッピー教会

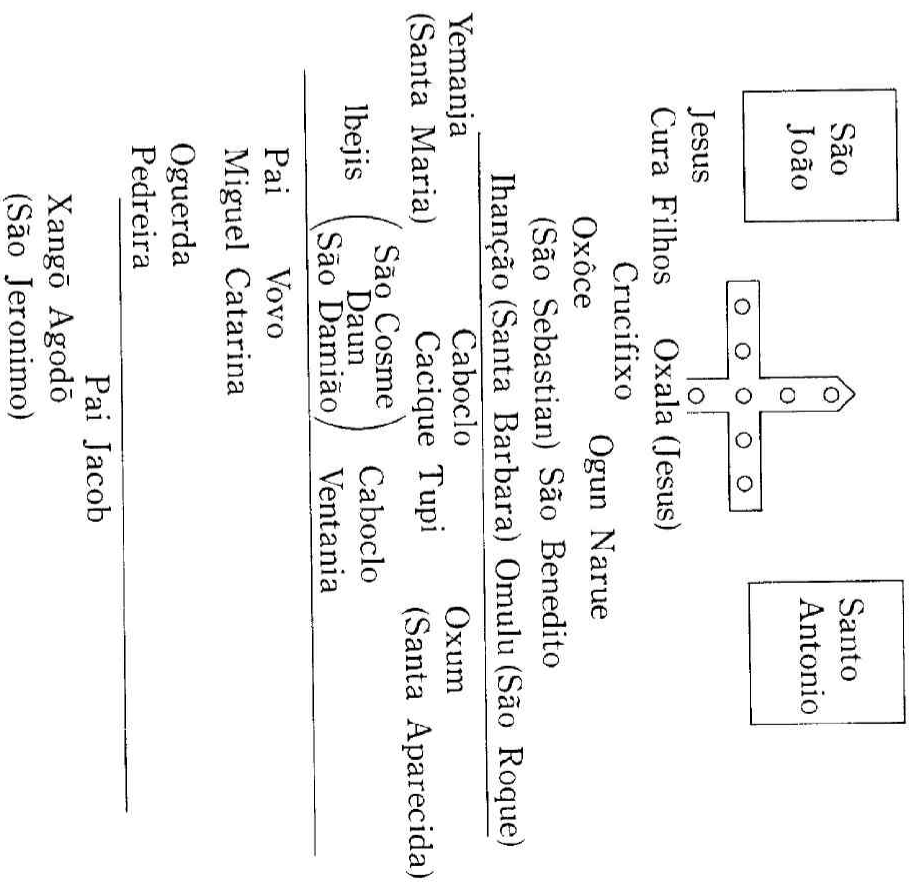
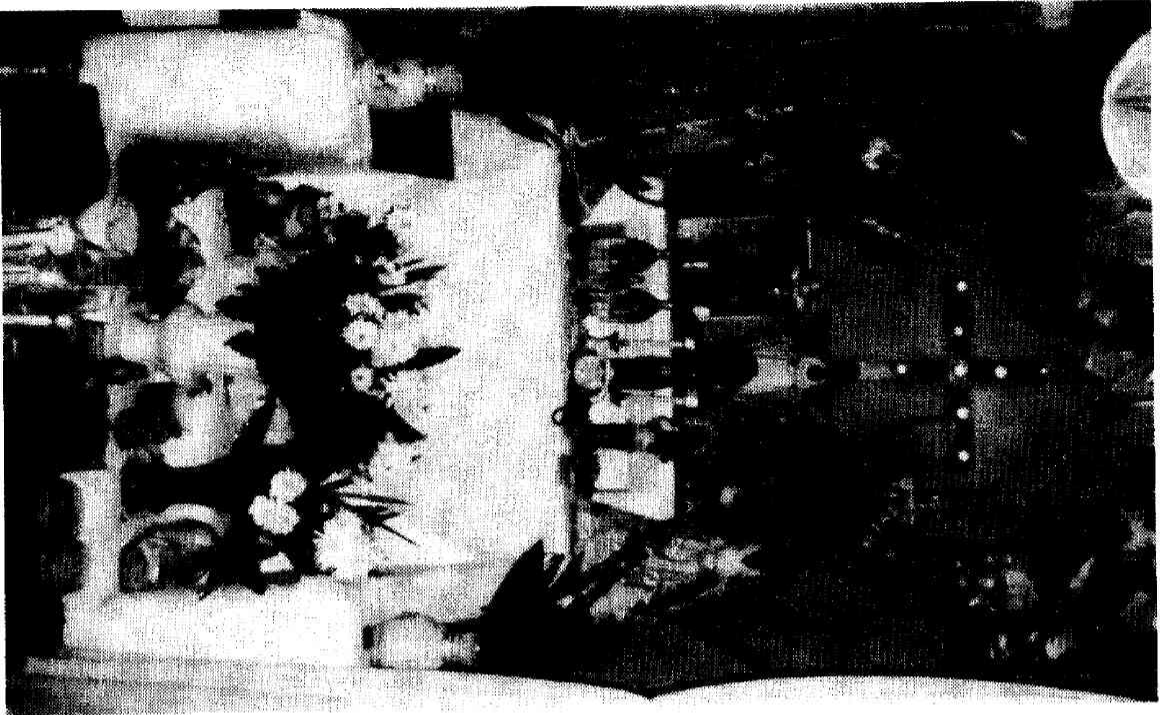
1 教会の成立

この教会は、一九六〇年九月五日、サンパウロ市デルミール・フェレイラ横町五に住む女性の教会主 (Mãe de Santo) ドナ・ジュディティ・マスカジユネ (Dona Juditi Mascagne) の住宅で始められた。この横町は、

町名変更により現在では、フランシスコ・ティノコ・カブラル通り五となり、日系人が教主の旧住宅を借りて住んでいる。教会を開いた二年後、グメルシンド区ラマリョ・オルティガン大通り二四五に現在の新教会が建てられた。教会の移転については、次のような伝説がすでにできあがっている。

開教して一年後、教会の主宰霊パイ・トゥッピー (Pai Tupi) が、部下の霊に命じて、海底の沈没船から、オランダ・ギルダ紙幣を運ばせた。すなわち、カボクロのパイ・トゥッピーが自分で持参したのではなく、物品を運搬する才能をもった神霊たちを働かせ、海水でびしょ濡れだった包みを客間のテーブルの上にとしんと載せさせた。時刻は午前一〇時頃で、教主は台所で Santa Macri という婦人とコーヒーを飲みながら雑談をしていた。この婦人はイタリア人で、現在の小教母 (Mãe Pequena) である Rosa Sapupo の母親で、今でもこの教会の信者である。二人は、紙幣を広げて乾かし、教主の知人の医者に頼んで、ブラジル紙幣に両替してもらい、パイ・トゥッピーの指示のとおり、現在の教会を一年余りかけて建設した。建設費に必要なだけのオランダ紙幣があったということである。

図1 カシケ・トウピー教会の祭壇



2 教会の建物と配置

教会は一一m×六mの祭祀場 (terreiro) と、八・七三m×六mの待合室からなり、カーテンで分けられている。祭祀場の正面に祭壇 (conga) があり、その裏側には準備室や教主の住居がある。祭壇の左隅の棚に、キンバダの黒呪術の神霊であったが、ウンバンダでは昇格して白呪術の神霊となったバイア系のリーニャ (上位の教団) の支配霊 Jose Pirintra の像が祀られている。これは教主の指導霊 (guia) の一つである。教会の入口を守護している像は軍神オグン (Ogun) である。

祭壇に並べられている神像には序列があり、上段にはアフロのオリシャと同一視されているキリスト教の聖人像が並び、下段には憑依霊の像が安置されている。この教会の祭壇では、聖像が次第に増加するのに比べ、憑依するギアの像は増えないので、下段にもカトリックの聖人像が多く並べられるようになったという。特にどの神像をどこに祀るかという規定はないが、エシュューだけは屋外に祀ることになっている。図1はその祭壇であって、神像の名前も示しておいた。括弧の中はカトリックの聖人名である。アフリカのオリシャとカトリックの聖人の対応は、伝統的カンドンブレにおける対応と同じであって、ウンバンダがアフロ・ブラジリアン・カルトに属していることを示している。

3 女教主 (マンエ・デ・サント)

ドナ・ジュディティ・マスカジュネ女教主は、最初は Tenda de Umbanda de Tupão に属し、次に Tenda de Umbanda Quatro Folha に一年間所属していた。現在では両教会とも消滅して存在しない。彼女は看護婦であった。トゥパン教会とフォーリャ教会との間に約一年の空白があり、その間、教主は自宅において Vovo Catarina の降霊会を開いていた。現在のバイ・ペケノ林田法人は、そこで Pai Tomé に憑霊され、教主の指導にあずかった最初の霊媒 (Medium) となった。したがって林田小神父は、フォーリャ教会には、教主と同行して教会員となっていたのである。

前述のように、一九六〇年九月五日、Cacique Tupi (トゥッピー族の酋長) という名前のギアの指令によって教会を開いたので、教会の正式の名は、主宰霊の名をとって Tenda de Umbanda "Cacique Tupi" である。

筆者が訪れた一九八八年六月一七日には元気であった教主も、八〇歳以上の高齢のため、一九八八年八月初旬に、心臓肥大で肺に軽い出血があったため咯血したので、一週間入院した。九月になっても体調が優れず、教会の礼拝に出席できるほど回復しなかったので、林田小神父が代理を勤めていた。一〇月頃にはたまたま出席していたが、再び入院し、体力が衰弱して病状もはかばかしくな

く、クリスマス前の一二月二三日を最後として、この教会は閉鎖された。

現在、体調のよい時は、月に一回か二回、自宅で細々と Vovo Catarina の降霊会を開き、教会員の数名を指名して参会させている。以前から、教主は、「パイ・トゥッピーから預かったお金ですから、教会を続けている間はお借りしていて、教会をやめるときには、教会の建物を全部売却して、慈善事業に寄附するつもりです。感謝をこめて、すべてを清算したいと思っています。」と語っていた。しかし、一九八九年八月の情報では、建物は他のウンバンダ教会に貸しているとのことである。

女教主の信仰治療 (Passe) によって救われた人は多い。林田小教父の場合には、次のように述べられている。

「私は、中風で足の自由を奪われていた父を歩かせてもらい、母の神経痛を治療していただきました。一九五二年、自動車修理工場で働いていて倒れ、記憶を喪失してから、頭痛止めに箱で買い続けていたグワライーナ (痛み止めの薬) も、私は飲まなくなりました。妻の乳房がはれて化膿したときには、女教主さまが炊事場で手術して下さいました。」

たまたまお礼を申し上げると、女教主は敬虔に次のように答えたという。

「私は、ただ慈悲深い白色霊のお力を伝える媒体なの

です。霊の乗るカヴァーローに過ぎません。私はあなた方と変りなく、神を信じている普通の人間なのです。神様が偉いのであって、私が偉いものではありません。私にお礼など言わなくてもよいのですよ。お礼はどうぞ神様へおっしゃって下さい。あなた方は神の子として恥ずかしくない行いができるよう、いつも気をつけることです。私だって、ともすると道を踏みはずすこともありますよ。まだ、サンタにはなっていないから……」

林田小教父に対してだけではなく、どんな人に対しても同じように話しているという。女教主の信仰と謙虚な人柄を示していると同時に、カルデシズムのたえず霊的向上のために努力するという思想の影響がはっきりと示されている。

この教会主が女性のマンエ・デ・サントであることは、前述のウンバンダの近代的指導者たちが男性のバイ・デ・サントであるのとは異なり、伝統的カンドンブレの線を守っているといえるが、女教主の病氣中は林田パイ・ペケノが教会主の代理として儀礼をとりしきっていたし、また、霊媒に男性が三分の一いることは、カンドンブレからの逸脱であるといえる。

4 プレト・ヴェリヨの日の儀礼

この教会は、水曜日がカボクロの日で、金曜日がプレ

ト・ヴェリヨの日である。一九八八年六月一七日（金曜日）の儀礼は次のようであった。

九時一〇分、一同白装束で祭祀場に集合して儀式が開始された。儀礼の順序は次のようである。①マンエ・ペケナ（小教母）がコンガから香粉の入ったカネカをとる。そこで、サラバー（Salavá）という祝福の挨拶をする。その仕方は、床（大地を意味する）に手をつき、互に右肩、右手の甲を交叉させ、右手の指先を合わせた後、左手の指先を合わせ、「サラバー」と唱える。この挨拶は、霊媒同士が行う。そして、デエフマッサン（Defmas-são）という浄化するための香を焚く儀礼が行われる。

②一同拍手。③マンエ・ペケナが立ち上り香煙を立ちのぼらせる。④祭祀場と平信徒の待合所との境の幕が両方に開かれる。⑤デエフマッサンの歌に合わせて、アタバケとアゴゴが鳴り出す。⑥マンエ・ペケナがデエフマッサンの香を焚きながら、コンガ↓アタバケの演奏者↓マンエ・デ・サント（ババロシア）↓パイ・ペケノ↓男性のカヴァーロたち↓女性のカヴァーロたち↓女性の信者↓オグン像↓男性信者の順番で浄化する。⑦マンエ・ペケナが「サラバー、デエフマッサン」と唱え、一同拍手。

⑧パイ・ペケノがコンガの左側に膝まずき、オリシャへの讃歌を次のように唱える。

Salavá Oxala, Salavá Yemanjá, Salavá Xangô,

Salavá Oxóce, Salavá Ogun, Salavá Iansão, Salavá Oxun, Salavá Preto Veho, Salavá Ibeji, Salavá Omulu, Salavá Umbanda.

一同指先を床につけて復唱、⑨パイ・ペケノが開式の辞（Abertura）を読みあげる。一同は各自の守護天使へ「主の祈り」を捧げる。⑩アタバケの伴奏で、一同「降霊開始の歌」「パイ・トゥピー讃歌」を合唱し、カヴァーロ全員ひれ伏して額づく。⑪ここで、カヴァーロにプレト・ヴェリヨが憑いて老人の状態になる。

九時二五分、信者は祭祀場に入ってきて、カヴァーロに相談する。悩みや軽い病気の人たちは、カヴァーロに憑依したオリシャに相談するが、特別に重い十字架を背負った人びとは、トゥピー族の酋長（カシケまたはモルビシャバ）の憑いたマンエ・デ・サントに相談する。筆者は、特別にマンエ・デ・サントの隣りに席を設けてもらって、自由に観察し、写真撮影もテープ取材も許可されたので、信仰治療の実状を明確に観察できた。見聞した事例をいくつか列記すると次のようである。

事例(1)

女性のカヴァーロと相談していた男性信者が急にあばれ出した。数人のカヴァーロが取りおさえ、その男性に憑いていた悪霊をなだめた。相談を受けていたカヴァーロが、その患者の体を三回自分のもっている数珠の輪を

通し、数珠で十字を切った。悪霊は退散したので、患者は平静になり、にこにこ笑って去って行った。

事例(2)

若者がマンエ・デ・サントに結婚の相談にきた。にこやかに話を聞いた後、教主はパイプで吸ったタバコの煙で若者を浄化し、数珠の輪に三回体を通し、再びタバコの煙で浄化した。その後で、彼の連れてきた婚約者を祝福し、同じように三回数珠の輪を通した後、二人に手を握らせ、その上に自分の手を重ね、タバコの煙を三人の手に吹きかけた。これが結婚の祝福のようである。

事例(3)

幼児の衣服をもってきた信者から、衣服を受取り、タバコの煙で浄化し、数珠の輪を通して、祭壇に供えた。病気の幼児の代りに、衣服を浄化することによって、治病儀礼を行ったのである。この衣服は、次の儀礼の日まで、祭壇に供えたままにしておくという。

事例(4)

腕の悪い女性に対しては、白い粉をつけてくりかえし何度もその部分を撫でた。この白い粉は、ゲシイ(Gessy)、または、プロレス・ド・カンポ(Plores do Campo)といい、神像や供物を売っている店で、正味一六〇gの袋を買うことができる。

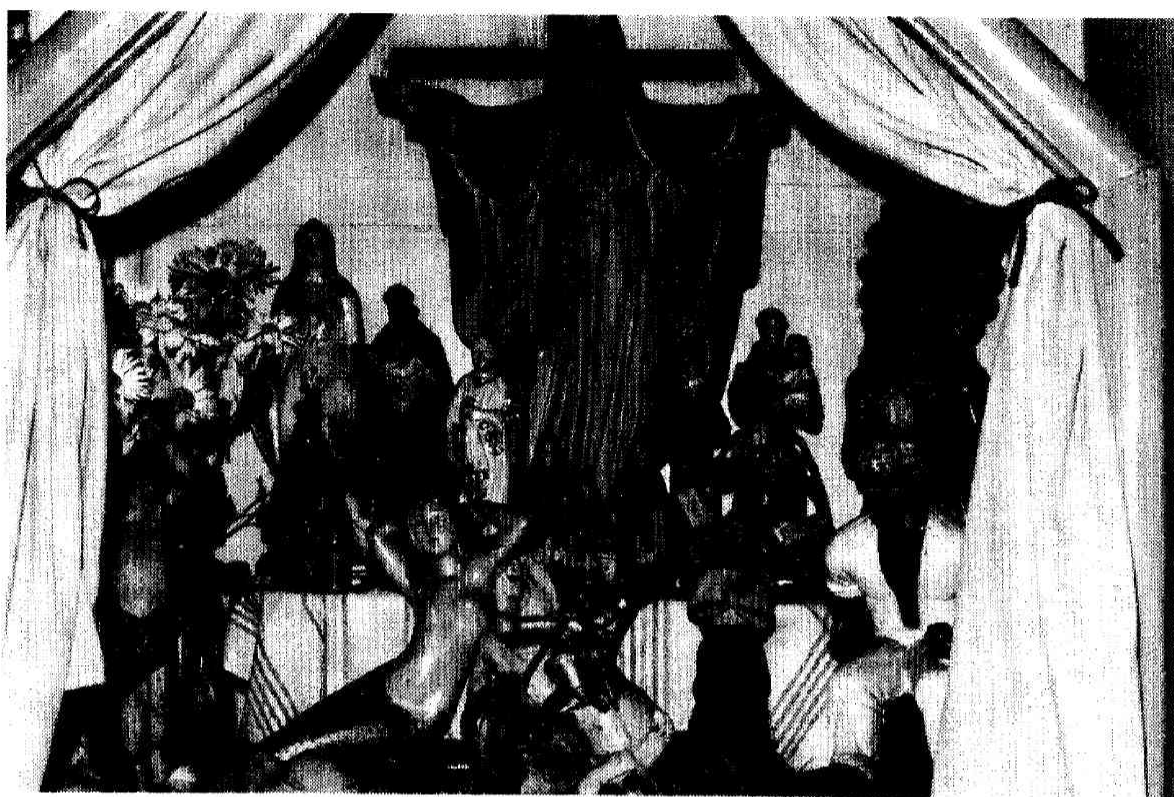
事例(5)

足の悪い人に対して、女教主はうつ伏せに寝かせ、数人のカヴァーロにおさえつけさせたり、足を引っばらせたりした後、踝に白い粉をつけたり、タバコの煙をかけたりして、最後に、女教主の席に來させて、数珠の輪を三回通し、十字を切った。

(注) 数珠に体や患部を三回通し、額や胸のあたりで十字を切るのが、プレート・ヴェリョの日の白呪術の一定の形式である。ローソク、コーヒー、ジュースなどをお供えやお礼として持参する信者もいる。

信者は、悩みの相談や治療がすめば、教会に留まっている意味はないので、次々に晴ればれとした顔で帰って行く。当夜は約四〇名集まっていた信者たちが去り、一〇時三〇分には、待合室は空っぽになってしまった。信者が帰った後で、カヴァーロたちはお互に話しあっていたが、それは憑依した霊同士の交流ということである。一時になると、アタバケの音が鳴りをひそめ、讃歌の大声が消えた沈黙のうちに、パイ・ペケノが閉式の辞を読みあげ、閉会の讃歌の後で、一同は祈りを捧げ、立ち上る。最後に、各カヴァーロが用いた煙草の火のためのローソクが集められ、儀礼はすべて終了したのである。当日は、マンエ・デ・サントが作ったという讃歌を三曲、特別に筆者のために、一同が歌ってくれた。記念撮影をしたり、コンガの神霊の説明を聞いたりして、教会

図2 林田法人宅の祭壇



	オシャラー Oxala				
	Jesus Cristo				
イェマンジャー Yemanja	聖ベネジット São Benedito	聖ペドロ São Pedro	聖リッタ・デ・カシア Santa Rita de Cassia	聖アントニオ Santo Antonio	カボクロ・ド・ソール Caboclo do Sol
オシェン Oxun			イベジ Ibejis		シャンゴー Xangô
Nossa Senhora da Aparecida (略称 聖アパレシーダ)	聖コズメ São Cosme	聖ダミアン São Damião	ドゥン Daun	モーゼ Moseis	パイ・トメー Pai Tomé
オショセ Oxôce	メニノ・ジェズス Menino Jesus	セレイア Sereia 人魚		オグン Ogun	聖シプリアーノ São Cipliano
聖セバスチアウン São Sebastião				聖ジョルジュ São Jorge	
シャンゴー・アボミ Xangô-Abomi Santo Antonio 聖アントニオ			Oxun オシェン Nossa Senmora da Aparecida 聖アパレシーダ Nossa Senhora da Conceição 聖コッセイサウン(イェマンジャー) Nossa Senhora da Gloria 聖グローリア Santa Catarina 聖カタルニア		
シャンゴー・アガンジュー São José Xangô-Aganjú 聖ジョゼー シャンゴー・アゴドー São Jeronimo 聖ジェロニモ Xangô-Agodô São Pedro 聖ペードロ シャンゴー・カオー São João Batista Xangô-Caô 聖ジョアン・バティスタ					

を辞したのは、一一時三〇分過ぎであった。

5 教会の経済状態

(i) 会費

一九八八年度の会費は、一月一〇〇クルザードスである。会費の値上げは、教主の許可があるときにのみ可能である。一〇〇クルザードスに決定したとき、五〇〇クルザードスにする予定であったが、主宰霊パイ・トゥピールからのお許しがないという理由で、教主の許可がえられなかったということである。

(ii) 教主の生活費

教主は、会費と年金で細々と生活している。水曜日と金曜日の降霊会以外に、指導に与るため、教主を訪ねる中流、または、それ以上の階級の人々が、謝礼として奉納する金額の方が、会費よりはるかに多額であるという。教主は、貧しい人が物乞いに行くと、惜しげもなく与えるが、不思議なことに、間もなく、他の人から与えた物の倍に値する物が贈られてくると語っている。

(iii) 教会の経費

会費収入 (毎月)	一〇〇×三〇=三、〇〇〇 crza
帳簿支出 家賃 (毎月)	二、〇〇〇 crza
雑費 (毎月)	七〇〇 crza

(注) 毎月の収支は帳簿では上記のようになっている。

帳簿に記入するのは、税務署の監査官の手前だけで、会費収入は全額マンエ・デ・サントの生活費として渡され、家賃はその中に含まれている。実際の支出は次のようである。

実際支出

花代 (毎月)	三、〇〇〇~三、五〇〇 crza
雑費 (毎月)	ローソク、マラフォ (火酒ピンガ)、煙硝、デエフマドル (香粉—アルファゼマ・インセンソ・ベンジョインの三種の混合物)
	一六、〇〇〇 crza
土地固定資産税 (一年)	一三、〇〇〇 crza

(注) 赤字は会員の有志が少しは補うが、大部分は林田の家族が負担している。

6 信者数と階層

林田法人が一九六五年から会計を担当してきたので、教会の経費についての証言は信頼できる。彼の帳簿にある信者(会費納入者)数は次のようである。(一九六五年のみ六月より、他は一月より)

一九六五	一六人	一九六九	七二
一九六六	三九	一九七〇	一〇一
一九六七	五五	一九七一	一〇〇
一九六八	七二	一九七二	九七

一九七三	八一	一九八一	四五
一九七四	五〇	一九八二	四五
一九七五	三九	一九八三	四一
一九七六	四九	一九八四	四一
一九七七	四九	一九八五	四五
一九七八	五〇	一九八六	五二
一九七九	四七	一九八七	四九
一九八〇	四一	一九八八	四六

信者の職業は、大工、左官、運転手、会社員、社長、商店主、教師および主婦などで、ブルーカラーが中心の中産階級で、ホワイトカラーや上流階級はきわめて少ない。

7 教会についてのまとめ

カシケ・トゥピー教会は、サンパウロの住宅街にある小さなウンバンダ教会である。主宰霊は Caboclo Caci-que Tupi であるから、アフリカのオリシヤではない。ここでは、オリシヤは憑依しない神霊であり、カボクロとプレト・ヴェリヨの儀礼の日が定められている。ウンバンダの中心的憑依霊である四霊のうちではクリアンサは祀られていないが、エシユの儀礼は教会の崖下でなされている。

林田小教父の指導霊はパイ・トメであるが、カボク

ロ・ド・ソールも憑依する。一人の霊媒にはただ一つのオリシヤだけが憑依して死霊は憑依しないカンドンブレとは異なり、ウンバンダではインディオの死霊カボクロもアフリカの老人の死霊プレト・ヴェリヨも憑依するのである。

カヴァーロたちは白装束のユニフォームを着ているので、それぞれの守護霊の衣裳を着ているカンドンブレとは異なる。憑依するまでの時間がきわめて短いことも、著しい相違である。カンドンブレの場合は、憑霊がおこるまで、一時間以上も、歌と楽器のリズムに合わせて、右廻りに、足を踏み、手を打ち、腰をひねりながら踊り狂う。憑霊が早くおこるカヴァーロもいれば、なかなか憑かないカヴァーロもいるから、延々二時間以上も、単調な踊りがつづくこともある。それに対し、ウンバンダでは、儀礼が開始されて一五分後には、カヴァーロ全員に憑霊が生じたのである。あまりにも短時間なので、林田小教父に質問すると、「儀礼のある日には、昼頃から行いを慎しみ、憑依されやすいように心の準備をしているので、カンドンブレのように、長い時間をかける必要はございません」ときっぱりと答えが出された。降霊開始の歌とパイ・トゥピー讃歌の合唱があって、全員がひれ伏して額ずくと同時に憑霊がおこったのは、ウンバンダでは当然なのである。ウンバンダの儀礼が現代的に合理

化されている証拠である。教会によって程度の差があることは否定できない。讃歌にポルトガル語が用いられているが、また筆者のために歌われたマンエ・デ・サントの自作の讃歌もポルトガル語であり、アフリカ語の讃歌を重ねているカンドンブレとは、この点でも異なっている。

この小さな教会では、役職などの組織はまだ不備で、雑務はもっぱら林田パイ・ペケノに集中している。マンエ・ペケノは仕事が忙しくて欠席が多いので、「自然にいつの間にか私が引受けることになってしまいました」と林田小神父は苦笑している。林田さんの熱い信仰心と人柄が、教会員の信望を集めていることは疑いない。信者の職業は多様であるが、職業による差別はなく、また、最低生活で苦しんでいる信者もいないようである。しかし、毎年一、〇〇〇分の一に貨幣価値が下る超インフレのブラジルにおいて、会費収入だけで教会の経費がまかなえないことは明らかである。今年教会を貸すことになったのも、インフレが原因であると想像される。

しかし、この教会がドナ・ジュディティ・マスカジュネが創設して閉鎖した教会であることは、ウンバンダの小教会の現状の好例であると思われる。マンエ・デ・サントを慕って集まり形成された教会は、ブラジルの連合機関である *Cupula Nacional de Umbanda* から毎年、

加入証明書 (*Identificação de Filiada*) を受けて公認の教会となる。この C.N.U. は、一九六三年に設立されたが、特別に教義・儀礼などについては規制をしないので、各教会は独立性と自律性を保っている。ウンバンダ信者の急激な増加に対応して C.N.U. が設立されたのであるが、工業化・都市化の著しいサンパウロ州では、第二次産業部門の経済活動人口、所得と教育水準の著しい上昇が見られ、中産階級が出現してきた。ウンバンダの教義や儀礼が、まさにこのような社会変動に対して積極的にそれを推進する主導的役割をはたしたことは、前に述べた通りである。カシケ・トゥピー教会のような小教会においては、そのようなウンバンダの革新的傾向を示すリーダーを発見することはできない。その原因は女教主の経歴や人柄にあると思われる。謙虚に神霊の指示の通りに、ひたすら自己の霊性の向上に努力しながら、慈しみをもって信者の悩みを傾け、さまざまな白呪術的知識によって解決を与え、慰め励まして、悩んでいる人々が苛酷な世界を生きぬいてゆく手助けをしようと願っているマンエ・デ・サントには、時代をリードするというような意識はない。個々の信者の幸福と平安を願うだけにとどまっている。したがって、この教会に集う人々の関心もそれ以上ではなく、もっと社会的上昇を願う人々は他のウンバンダ・グループに属することになる

と思われ。降霊会に出席しないが、指導に与るために女教主を訪ねる中流、または、それ以上の階級の人々の謝礼が、会費よりはるかに多額であることは、女教主の円満な人間的魅力の証拠にはかならない。

ウンバンダの教会は多種多様であって、近代化の担い手を積極的に育てようとする教会もあれば、現実の個人の悩みの解決に専念している教会もあり、社会の底辺にあえいでいる民衆の救いに献身している教会もある。カシケ・トウピー教会は、ささやかに人々の幸福と平安を支える役目を果たしてきた。それ以上を望まない女教主は満足して教会を閉じたと思われる。閉鎖された後、教会員たちは四散したが、教主は彼等がウンバンダの信仰を失わずに生きることが願うだけで、後継者が教会を維持することは期待していない。

小さな教会の成立と展開と閉鎖までの経過を、調査することができたのは、女教主の指導にあずかった最初の霊媒であり、この教会と共に歩いてきた生き字引のような、日系人としてはただ一人のウンバンダのパイ・ペケノである林田法人のお蔭である。彼の経歴と生き方を述べることは、この教会に別の面から光をあてることになると思う。

五 林田法人小教父（パイ・ペケノ）

林田法人は、一九二四年、熊本県松橋町まつはせで生まれ、一〇歳のときノロエステの兄に呼び寄せられてブラジルに渡った。ノロエステ線グワイサーラ駅ウニオン植民地、パウリスタ線ポンペイア駅アミザーデ植民地、同線のマリリア駅アルヴアレア耕地、内藤耕地を転々として働き、二〇歳のとき、マリリア市の鉄工所で職工見習となった。数え年二七歳のとき結婚、妻は二五歳であった。その後、パラナ州アサイ町で二年間、ロンドリーナ市で一年間、自動車の板金工として働き、三一歳のときサンパウロ市に出てきた。日系移民のたどった典型的な経歴であるといえよう。

一九五二年、自動車修理工場で働いていたときに、急に倒れて記憶を喪失した。したがって、以上の経歴は、後に兄や妻から聞かされたものだけのことである。

彼がウンバンダに入信するようになったのは、サンパウロ市で、偶然にも女教主の家の真向いに住んでいたからであるという。干魃がつづいて井戸水が枯れてしまったので、井戸水をよく出る向いの家へ、妻が水をもらいに行ったところ、親切にも遠慮なく汲みに来るようにいわれた。そのとき、何の気なしに家の中を覗くと、奇妙な神像が祀られていたので、「あれは何ですか」と質問す

ると、「降霊会の日にいらっしゃい」と誘われた。そこで、何となく好奇心にかられて、夫婦で出かけたのがきっかけである。

彼に憑霊現象がおこったのは、一九五八年の四旬節の頃であった。教主に憑依する「慈悲深い白色霊」(Alma Branca da Caridade)のお告げがあった。

「お前には、克蘭デイロ(霊媒治療者)の霊が乗りうつるから、よいカヴァーロ(馬すなわち霊媒)になれる。セマナ・サンタ(聖週間)が過ぎて、次の金曜日(再びここに来るから、その前に、私のカヴァーロ(女教主のこと)に、お前に霊を乗せる準備をするように伝えておきなさい。……霊を受けるときには、少なくとも五時間前から酒と食物は禁じます。二四時間以上性交せずに来ること。全身を清めること。すがすがしい心で、人を侮ったり怨んだりしないこと。妬み心は霊を受ける妨げになるからね……」

彼は「その夜うけたまわりました禁戒は、今でも心の奥に秘めて慎しみつづけております」といっている。

聖週間が終わり、次の金曜日の午後九時頃、教主宅の応接間で、彼への降霊が行われた。彼はお告げのとおり禁戒を守って教主宅に行き、椅子に腰をかけて瞑目し、心を神に集中し、「自我から離れた心境になりました。すると、確かに人の指とおぼしきものが、左の頬を押し

ますから頭が右へ傾き、はてさてこんどは右の頬を指が押しますので、頭が左へ傾きます。右から左へ、左から右へと、首の骨でも折れたように、ぐらりと動きました。しばらく続いた後、女教主さまに肩をたたかれ目を開き、なかば眠りから覚めた思いで立ち上り、うすぼんやりでにっこり顔をほころばせました。私は、指先が頬を押ししたのを記憶しています。すしおぼろでありましたが、頭を左右に動かすように仕向けられたので、嘘ではありません。肉眼に見えないもの、エクトプラズムとも言いえますか、否定できない感じは事実で、霊を知りはじめた第一夜の物語りです。」

これが、『のうそん』という日伯農村文化振興会が発行している雑誌の「第一〇〇号記念特集号(一九八六年五月)に、衣川笙之介というペンネームで「私の十字架」という題で寄稿した林田法人の告白である。傍で見ている彼の妻は、「女教主さまは、夫の頭の上に手をかざされただけで、指で押したりはなさいませんでした。指で押した人はいなかったのです。」と証言している。女教主は、「よいカヴァーロになる素質がある」といって喜んだそうである。

次の金曜日の夜九時頃、第二回目の降霊があった。彼の告白をつづけよう。「女教主さまに乗りうつられた慈悲深い白色霊に導かれて来られた霊が、私の体に乗ろう

つられ、初めて霊の乗るカヴァーロになりました。乗りうつられるとき、全身がしびれ、体力のすべてが首のあたりに集中され、息が切れるまで力んで気が遠のき、何となく死んで魂が抜け出る感じがいたしました。その刹那、私の魂が抜け、霊が入って、体を支配するわけです。(宗教学的にいうと、脱魂と憑霊というトランス状態になったといえる。) ちょっと字にかけないようないきさつも交りますが、大略そんな有様です。乗っておられた白色霊がお帰りのときも、やはり乗られるときと同じで、ただし逆の作用があって、私のもどって来ます。」これが、カヴァーロになったときの体験の告白であり、彼は「他の霊媒たちに問いましたら、ほぼ似たりよったりの状態のようです」といっている。

林田法人に憑いたギア(指導霊)について、女教主は「あなたに憑いたのはパイ・トメ(Pai Tome)です」と告げたという。なお、ギアがカヴァーロに乗りうつるときは、人体のどの部分から入るかという筆者の質問に対して、女教主は、「ヴォヴォ・カタリーナが乗りうつるときは、私の足からですが、霊媒により、ギアによって異なります」と答え、憑依したときカヴァーロの脱魂した霊魂のいる場所については、「その人の霊魂は、必ずその人の体の右側に寄り添っている」という答えであったと、林田法人は手紙で知らせてくれた。

パイ・トメは、アフリカ南東部のインド洋に面したモザンビークの出身で、奴隷に売られて一三歳のときブラジルの北部に渡って働き、七四歳で他界した。死後は年齢をとらぬから今でも七四歳の老人のままであるという。パイ・トメの正式の名前はパイ・トメ・デ・モザンビーク(Pai Tomé de Moçambique)であり、パイ・トメとは彼の働いていた農場の人が呼んでいた通称で、彼の父は「小僧」という意味で、「バクロ」または「バクリー」と呼んでいた。父は克蘭ディオとして、人々の病気を治したりする呪術の腕がよかったという。父の真似をしているうちに、パイ・トメにもいつの間にか治病の力が備わって、もっぱら白人の病気を癒したり、悩みを聞いたりすることが仕事となった。現在は、白色霊園(Aroanda)に住み、供物を捧げてくれた人の心を受取って栄養としている。パイ・トメのような白色霊も、人々に力を貸しながら、自分たちも修行をして、霊性の向上に努めていると信じられている。

林田法人の家にはコンガ(祭壇)がある。図2のように神像が配置されており、パイ・トメ像はオシャラ(イエス・キリスト)像の次に大きく、木の切株に坐っている。

林田宅では、土曜日にパイ・トメの儀礼が行われる。家族や数人の客が参加して見守る中で、林田はアベルト

ウラ（開式の辞）を読み、祭壇に向って深々と頭を下げ、目を閉じ、両手をうしろに組む。三〇秒ほど経過した頃「フツ、フツ！」という声をあげたとたん、パイ・トメが憑いた。腰をかがめ、老人のようによろよろめき、咳こみながら、部屋の入口の近くに用意されたトッコ（Toco 切株）に腰をかける。トッコは、輪切りにした直径三三cm、高さ二〇cmの木の切株で、パイ・トメのシンボルである絵文字（Pont Riscard）が書かれている。パイ・トメの憑依した林田は、白いバイアの石（Pemba）で、ココ椰子の実で作った器（Coite）にまじないの絵文字を書き、間もなくコイテにマラフォの火酒を注ぎ、それを飲みながら白呪術が始められた。マラフォ（Marafo）は、火酒三蜂蜜一の割合で混ぜ、アルーダという薬草の小枝が入ったピング（砂糖キビを原料にした火酒）である。

パッセ（信仰治療）は、さまざまである。訪ねてきたバスの運転手は、頭に異状があるようで、心が乱れたり、目がちらつくことがあるので、何とかして欲しいという。その男に対し、パイ・トメは、一本のろうそくにまじないをして火を点け、彼の頭の上から順次にろうそくを回しながら足の先まで、ゆっくり体を光で包んでゆく。体にすっかり光をあてて、パイ・トメは首から数珠をはずし、数珠の先端に付けられた十字架で、患者の額から胸

のあたりへ十字を切り、呪文を唱える。男は握らされたローソクに心をこめ、パイ・トメから「祝福が終ったら、火を消し、家に持ち帰って毎日火を点けて祈り、済んだら消しておくように」と言い渡された。また、息子との折合いが悪くて相談にきた母親は、小さな祈りの本に茶色のシャンゴを象徴するペンバで表と裏に十字を描き、祝福をこめ、慈悲を授かるように祈った本を、掌を上にして受取った。その他、右手の親指の先をコイテのマラフォで濡らし、訪ねてきた人々の額、首、掌などに十字を描いたり、足の不自由な人のズボンにペンバで絵文字を描いたりする。

三時間ほど経った頃、パイ・トメはコイテに残っていたピングを飲み干すと、ゆっくり立ち上り、祭壇の前進み、両手を後ろに組んで膝まずき、静かに目を閉じた。「ホッ！」という声と共に、パイ・トメは、つつがなくその日の勤めを終って、霊媒林田から抜け出した。一〇秒ほどである。この瞬間の写真を見て、彼は次のように説明した。「満身の力を振り絞って息が切れるはずみに、私の魂と入れ替ります。両手をうしろに縛られた奴隷の頭の名残りが、時の流れを超えて変ることなく、そのまま再現されたのがこの姿勢だと思えます。カヴァー口は、うしろで両手を組み、足指はつま先立って、頭を下にさげ、体を前に曲げているのです。」

パイ・トメの儀礼について「訪客の中の初心者は、現世利益を授かりたくて、いろいろな願いをこめて祈ります。しかし、靈性が向上して、いくつかの段階を昇った人々は、もう特別なお願いをすることはないので、ひたすら感謝し、お礼の祈りを捧げるだけです。オリシャは祀り上げられて憑霊しないのですが、その神像は神靈の徳と力を思い出させるシンボルにすぎません。さまざまな癒しを行って下さるのは、慈悲深いパイ・トメなのです。カヴァーロは、そのお命じになるままに、この世でのお勤めに励むほかはないのです。すばらしい人生だから、永遠への喜びに胸をときめかしているのです。ローソクのように、いつかは燃え尽きて無に帰るのではないでしょうか。それでも確かに燃えているのです」と語った。

以上、林田法人が、カシケ・トゥピー教会のパイ・ペケノとして、また、自宅におけるパイ・トメのカヴァーロとして、どのような仕事をしているかを述べてきた。しかし、彼の活動の他の一面を見逃すことはできない。それは詩人、および、小説家として、衣川笙之介というペンネームの林田法人である。その作品のリストは次のようである。

(1) 一九八六年五月 エッセイ「私の十字架」、詩「のうそん百号乾盃」『のうそん』第一〇〇号記念特集号、八

七〜八九頁。

(2) 一九八七年二月 小説「刺され首」(佳作二位)『コロニア詩文学』二四号、第四回武本文学賞特集、三二〜四三頁。

(3) 一九八八年一〇月 エッセイ「オリシャの声々」(金曜日)『造形』三号(サンパウロ詩作研究サークル)四一〜四四頁。

(4) 一九八九年一月 小説「オリヴィア」(受賞作)『コロニア詩文学』三〇号、第六回武本文学賞特集、三〇号記念文芸評論、一六〜二九頁。

(5) 一九八九年八月 エッセイ「ピエロのたわごと抄」『コロニア詩文学』三二号、随筆特集、八五〜八八頁。

このほか、詩集として『七色の壺』(一九八七年、妖洞院書房発行)がある。一九八二年に専門詩誌『亜熱帯』第二四号に「百八十度」と「道化街道」が掲載されて以来、『亜熱帯』に欠かさず寄稿してきた作品の集大成がこの詩集である。

友人の横田恭平は序文に「通観するに、林田さんの作品は異常である」と書き、「詩美の追求者として、表現の新鮮さを失うまいとする作者の努力は、作品ににじみ出るその人柄を誠実さと相俟って、読者に和やかな愉悅感を与える」とし、「たのしい詩の書き手林田さん」と述べている。

また、武本文学賞の選者である伊那宏は、「『オリヴィア』の世界は文学か」という評論（『コロニア詩文学』第三二号、一九八九年八月）において、「刺され首」と「オリヴィア」の主人公ルイ・ナミキは、衣川笙之介という作者の分身であると言うよりも、彼そのものと言った方が適切で、言うなれば作者は「自己体験記」を小説化しているのであると評している。「青年時代記憶喪失症にかかったという彼には、土にまみれて成長した自分の姿が蘇らず、従って、作品の中でそれらしき情景を繰り広げることが出来ない。出来ることは、それ以後の記憶に関連した事柄を作品化することだけで、手っとり早いところ現実の日常生活を描いて見るのが、彼に出来る文学作業であったのだ。彼の書く作品が宗教臭を持っているのは、だからごく自然のスタイルであって、そこに何か宗教的目的があると考えるのは穿った見方となる。彼は、文学する人誰もがするように、自己体験を土台にして一つの物語りを構築しているに過ぎないのである」。彼は、衣川作品には宗教宣伝の邪心がないことを認め、「何より筆致がひたむきで、読後感には或る種の快さがある。ただし、高度な文学的な感銘といった類のものとは異質な、言ってみれば、霊を媒介する人物のそれ故の悩みとといったものがかすかな感銘に似た形で胸の中に残る」という。「作品の裏面や底辺に横たわっている作者の実生

活との関わりが解明できると、全体を覆っている怪しげな臭みが取除かれ、そこには克蘭ディロ作家の書いた日常小説が、まったくの異文化の衣をまとって浮上していることに気づくはずである。単なる奇蹟物語ではなく、奇蹟を呼び起こすまでの一人の人間としての克蘭ディロの姿が、文学的プロセスを経て展開されていることが解るはずである。」とし、「今後このテーマを、シリーズとして更に書きつなぐとする場合、霊をつき放したところで克蘭ディロ・ルイ・ナミキを、どこまで人間として扱いきれるかが成功の鍵となる。」と述べ、「作者は、霊をつき放した後のもぬけの殻となった自身の内面をじっくりと見つめ直してみることが、今、作者衣川笙之介の何よりもやるべき文学作業ではなからうか」と結論している。

文学者林田法人に対する好意的ではあるが厳しい批判である。一九八九年の夏、林田自身は、この本を筆者に「今までの書き方では駄目だそうです」と少し淋し気に微笑しながら、「奇遇」と題したのうその小説賞の落選原稿と一緒に手渡してくれた。「刺され首」「オリヴィア」「奇遇」は、克蘭ディロとして、求めに応じて遠方まで治病に出かけて行き、悪霊に憑かれた人や足の不自由な少女などを治療した体験を小説に書いたものである。

筆者は、これまで、克蘭ディロだけがわかる貴重な

体験を記録として残して欲しいと激励してきたし、小説に書かれたときにはどの程度のフィクションが加わっているかと遠慮なく質問して、事実と記述との違いを明確にすることに努めてきた。彼も率直に質問に答えてくれた。宗教学を専攻する筆者にとっては、林田法人はかけがえのないインフォーマントである。文学者衣川笙之介の大成は、筆者には直接の関心事ではない。しかし、彼が作品を続々と発表してくれることは、資料がますます増加することになるので、大歓迎である。本稿にも、衣川笙之介のエッセイや小説を利用したが、林田法人に事実を確かめた上での記述であることを付言しておく。

六 おわりに

ウンバンダについては論じなければならぬことが多く残されている。憑霊現象、シャマニズム、シンクレティズムなどのほか、ウンバンダの成立と展開、社会との関係、将来への展望などについて述べるには、枚数も限られているので、カシケ・トウピー教会の実態の報告にとどめた。マンエ・デ・サントを敬愛し奉仕に徹底している日系人のパイ・ペケノ林田法人に対し、衷心より感謝し、この稿を終わりたい。

(ふじた・とみお／経営学部教授)

注

- (1) Esther Pressel; "Umbanda in São Paulo: Religious Innovation in a Developing Society" in Erika Bourguignon (ed.), *Religion, Altered States of Consciousness, and Social Change*, 1973, Ohio State University Press.
- (2) Renato Ortiz; *A morte branca do feiticeiro negro*, 1978, Vozes.
- (3) Diana Brown; *Umbanda: Religion and Politics in Urban Brazil*, 1986, UMI Research Press.